

井川山林の歴史とリニア工事 (土地所有者として)

関係各位におかれましては、南アルプスの自然環境の保全について
ご議論をいただいておりますこと、お礼申し上げます。

十山株式会社
2022年11月16日

目次

1. 十山(株)について
2. 井川山林の位置と範囲
3. 井川山林の歴史
 - 3-1. 江戸時代の木材生産
 - 3-2. 当社の木材生産
 - 3-3. 電源開発
 - 3-4. 観光利用
(特種東海フォレストほか)
4. 井川山林基本計画
5. 特種東海製紙グループのSDGs
6. 井川山林の事業(価値創造)
 - 6-1. ウイスキー
 - 6-2. 観光
7. リニア工事に対する考え方
 - 7-1. リニア工事への懸念
 - 7-2. リニア工事(JR東海)への期待
8. まとめ

1. 十山(株)について

- 十山は、特種東海製紙グループの1社。2020年に井川山林などを管理する部門が新設分割により分社化した。
- 特種東海製紙の前身の一つである旧東海パルプは、大倉喜八郎が1895年に井川山林を取得し、豊富な木材資源と大井川での水力発電を組み合わせた製紙原料の会社として1907年に創立。
- 大倉喜八郎が井川山林を取得してから127年。私たちが経営管理を行ってきた。
- 十山の使命 自然を楽しみ自然を守る人を育む
- 活動方針 Sharing the Alps
- 現在の主要事業は、社有林における不動産事業とウイスキー事業。
- また、井川山林内事業として、特種東海フォレストが観光事業を営んでいる。
- なお、特種東海製紙グループは、下流域では赤松水力発電所と新東海製紙島田工場が水利権を保有。利水者の一員。

2. 井川山林の位置と範囲

- 面積24,430ha、3000m峰10山を擁する広さと高さで日本一の社有林。
- 南アルプスユネスコエコパークの中心部に位置。
- 静岡工区のトンネル工事ヤード、主要な発生土置き場は社有林内。



ユネスコエコパークと井川山林



井川山林内のリニア工事

3-1.江戸時代の木材生産

地元(田代・岩崎)の稼ぎ山
樽木と宍料の伐り出し

「火事と喧嘩は江戸の華」
社寺造営など
幕府による御用材の伐り出し

- ・ 紀伊国屋文左衛門ら伐採
- ・ 徳川幕府は、1800年台前半を中心に井川山林内各所で木材生産を実施

1896年の山林巡視日記
(帝国大学)、明治後期の登山記録(日本山岳会)にはこれらに関する記述はないに等しい。

西俣
1817、1832、
1840、1841~1843、
1845、1857

奥西河内
1802、1827、
1832、1840

本流沿い中流
1800、1847~1849

本流沿い下流
1792、1797~1802
1817、
1832~1836、
1848~1849

東俣
1807~1808、
1817、1831、
1832~1835、
1836~1839、
1839~1841、
1844~1847

本流沿い上流
1802、1816、
1845

倉沢
1806~1807、
1816、
1825~1827



図: 江戸時代御用材の伐り出し(井川村誌から)

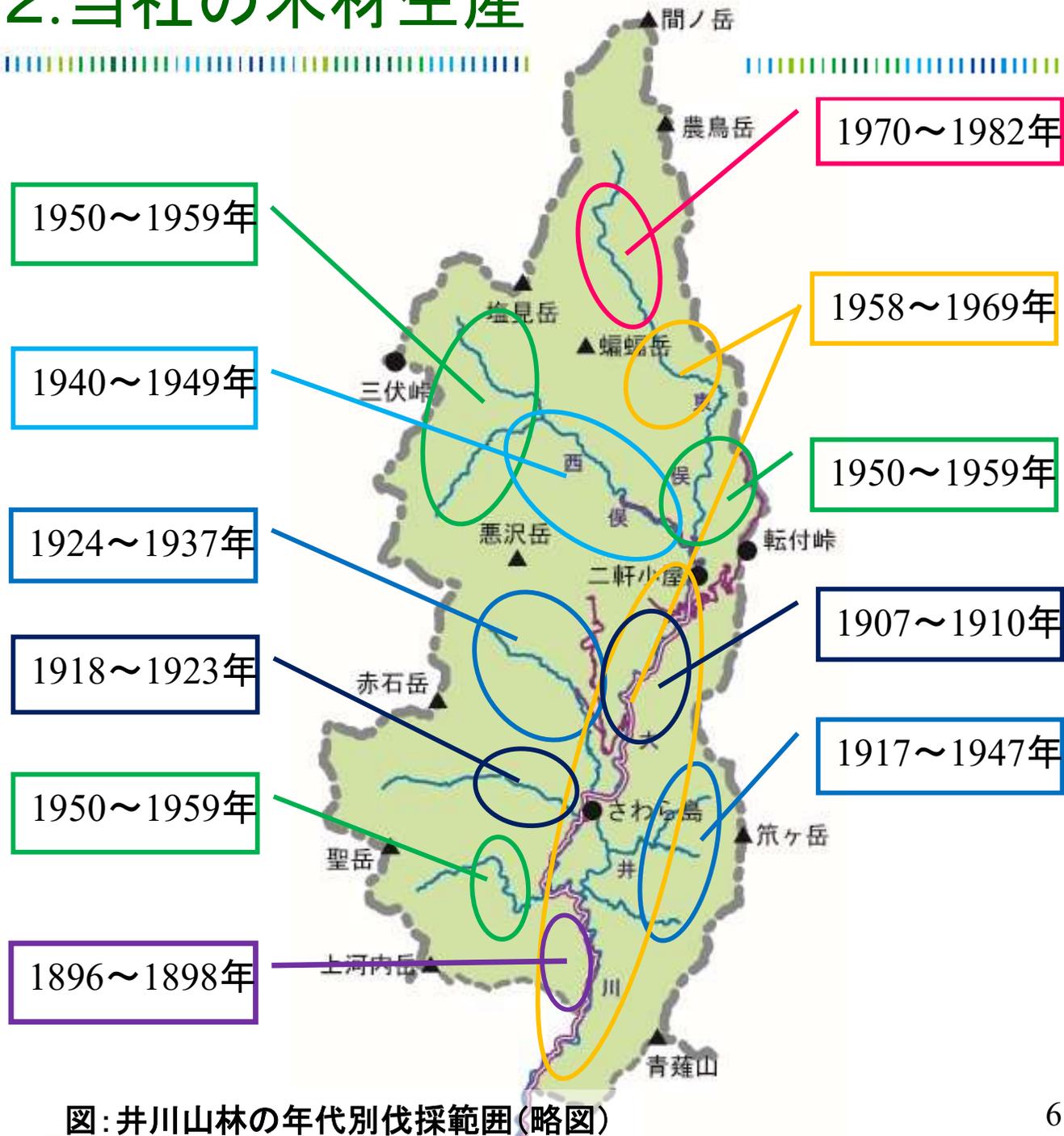
3-2. 当社の木材生産

大倉喜八郎取得以降、
1982年まで各所で木材
生産を実施。

(本流沿い→西俣→東俣)

- 2000mの稜線を越えて山梨県側に材木を運搬する大規模索道を架設
- 1970年台後半から単木集材可能なY型集材架線を開発し導入(環境保全)

井川山林各所で伐採をしたが、
今では国立公園拡張候補にもなるほど森林が回復。



図：井川山林の年代別伐採範囲(略図)

3-3.電源開発

1928年

東京電力 田代川第2発電所運転開始
(田代ダム、導水路TN)

1962年

中部電力 畑薙第一発電所運転開始

1990年

中部電力 赤石発電所運転開始
(赤石ダム、導水路TNなど)

1995年

中部電力 二軒小屋発電所運転開始
(取水堤、導水路TN)
中部電力 赤石沢発電所運転開始
(取水堤、導水路トンネル)

- 大井川の水は導水路を通り高度に利用されており、その分表流水は減少
- 畑薙第一ダムには年90万立方メートルの土砂が堆積

- しかし、井川山林全体としては自然度の高い場所として高い評価をいただいている



図：井川山林関連の水力発電施設位置図

3-4. 観光利用(特種東海フォレストほか)

- 1964年 南アルプス国立公園指定
静岡県・静岡市、登山小屋整備
- 1974年 二軒小屋ロッジ営業開始
- 1978年 さわら島ロッジ営業開始
- 1989年～1998年
静岡県・静岡市、登山小屋を更新
食事の提供が可能となる
- 1993年 送迎バス運行再開
- 1994年 NHK、日本百名山放送開始
- 1997年 さわら島ロッジ新館営業開始

- ・ 井川山林内 ロッジ2軒、登山小屋11軒
- ・ 年間宿泊者数はこのべ約24,000人
- ・ 登山客、釣り客が中心
- ・ 隣接地に農鳥小屋、塩見小屋、三伏峠小屋もあり、井川山林内施設以上に多くの利用がある。

■環境面の課題

登山客増加に伴う環境負荷の増大



図: 井川山林一帯の登山小屋

4. 井川山林基本計画

- 策定： 2017年7月
- 背景： エコパーク登録やリニア工事など大きな社会環境の変化
長期的視点で将来像を見据える必要が生じたこと

- 基本理念： 自然を守り、自然を活かす
〔 井川山林の価値は豊かな自然である。
自然を未来永劫育み、最重要資産として活用する。 〕

■ 活用(事業)の考え方：

① 社会貢献の視点

豊かな自然が人々にゆとりや安らぎを、自然由来の素材が安心・安全をもたらすことで、豊かな社会の創造に貢献する。

② 企業価値向上の視点

自然度を維持・向上させることを最優先としつつ、自然愛好家の受入れや、豊かな天然資源を自然度を維持し活用することで収益化を図るとともに、自然の価値を広く認知化(ブランド化など)し、当社の企業価値向上をはかる。

4. 井川山林基本計画

■長期運営方針:

①全山を一体管理

②自然を広域に厳格管理

〔 自然保護地区14,539ha、林地保全地区1,504haの設定 〕

③自然環境の保全と活用の調和をはかる

〔 自然環境の恩恵を有効活用し
社会に心豊かな生活を提供する
→観光事業と森林資源を活用した
事業の推進 〕

④地域一体の活動

〔 地域と基本理念を共有、協調体制
を築き、地域の活性化に寄与する。 〕

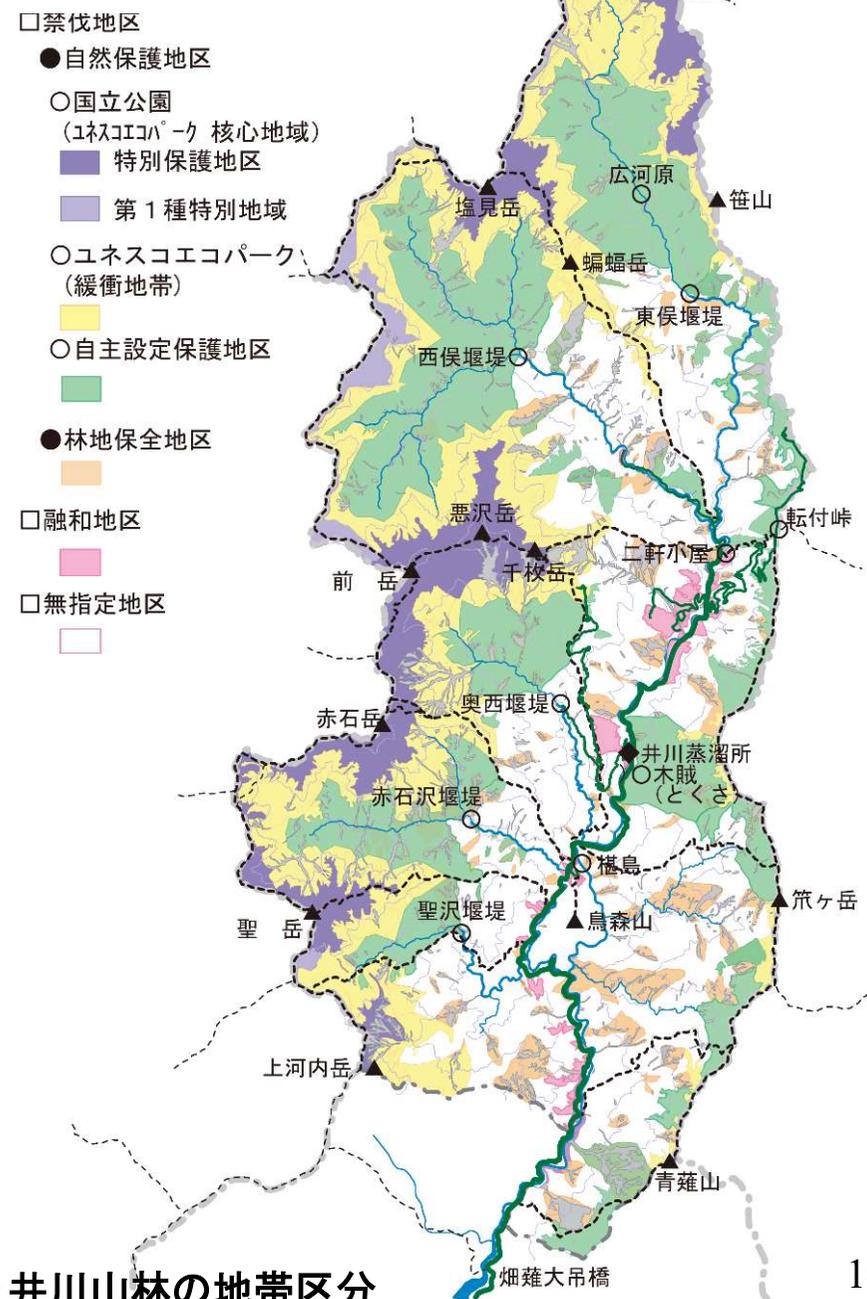


図: 井川山林の地帯区分

5. 特種東海製紙グループのSDGs

持続可能な社会の実現を目指して
～これまでもSDGs これからもSDGs～

■ サステナビリティ基本方針

- 私たちは、自然との共生に努め、自然の恵みを将来世代に引き継ぎます
- 私たちは、製品・サービスを通じて社会・文化の発展に貢献します
- 私たちは、ステークホルダーから信頼される企業を目指します

■ 特種東海製紙グループのマテリアリティ（重要課題）

地球環境との共生

- ① 気候変動問題への対応
- ② 社有林の活用と生物多様性保全への貢献
- ③ 持続可能なサプライチェーンの維持
- ④ 資源の有効活用と環境負荷の低減
- ⑤ 安定した製品提供と新製品の開発

地域・社会との共生

- ⑥ 地域・社会への貢献
- ⑦ 安全安心に働ける職場環境づくり

● 井川山林基本計画
自然を守り、自然を活かす
森林の多面的機能の発揮

● 具体的な取り組み

- 環境省 30by30アライアンスへの参加
→ 自然共生サイト
- 静岡県 南アルプスを未来につなぐ会
- 南アルプスエコパーク静岡地域連携協議会

6. 井川山林の事業(価値創造)

【基本計画>長期運営方針】 ③自然環境の保全と活用の調和をはかる

■目的: 自然環境の保護・保全と自然を活かした事業を積極的に展開し、井川山林の有効活用と企業価値の向上をはかる

①特徴を活かす

わが国最大の面積 南アルプスの自然環境

②長期的視点に立つ

短期的投資判断に偏らず、将来に向けた投資を行うことが他社との差別化につながる

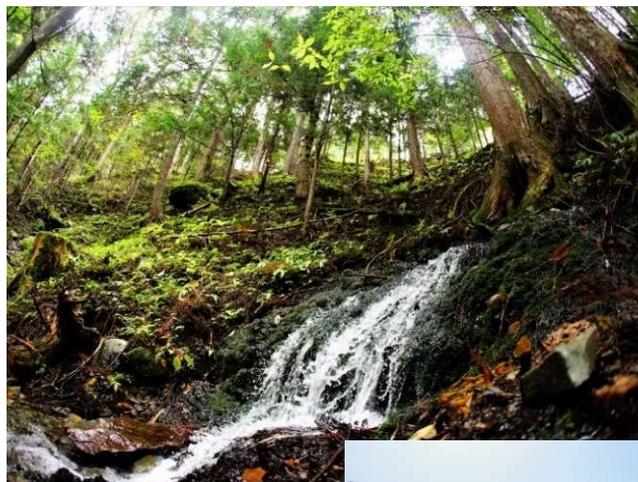
③高い自然価値のブランドを築く

井川山林の価値を高めると共に将来の事業展開に資するブランド戦略をとる

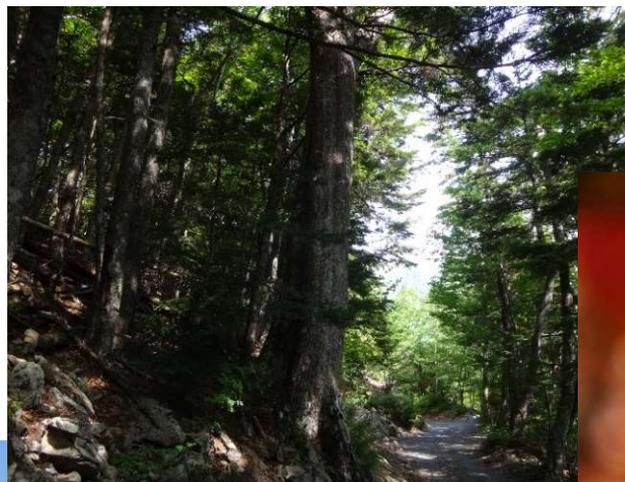
■ウイスキー事業と観光事業を2大事業として取り組む

6-1. ウイスキー

- 井川山林の天然水(仕込み水・割り水)、木材資源(樽)、気候(熟成環境)を活かした新事業
- 「自然と人間社会との共生」というユネスコエコパークの目的にも合致
- 2020年11月、蒸溜所を竣工させ原酒の製造を開始



ミズナラ



木賊の天然湧水



標高1200mの気候



ニューボーン

6-2. 観光事業

- 特種東海フォレストが2軒のロッジと9軒の登山小屋を運営。
- 十山として、森づくり体験などライト層の誘客を模索中。
- さわら島においてリニア工事宿舎の有効活用(エコパークの利用拠点)を計画中。



さわら島レストハウス
(特種東海フォレスト)



森づくり
ツアー



小河内岳
避難小屋



さわら島構想

7. リニア工事に対する考え方

①環境保全 ②地域振興 ③井川山林維持への貢献 が前提条件

JR東海から申し入れがあり、検討を重ねた。自然環境に対する懸念はあったが、リニアは次世代の重要な社会基盤であるとの認識に立ち、静岡県・静岡市と連携して対応することとした。

当社としては……

①井川山林の価値は自然環境にある …… 自然環境の保全

②リニア(全幹法)の目的は地域振興、駅ができない

…… 地域振興への寄与

③南アルプスを守り続ける使命がある

…… 井川山林維持への貢献

……の3点で交渉。



前提条件についてJR東海から一定の回答を得られたこと、今後もしっかり対応していくことの確約が得られたことから、準備工事を受け入れることとした。

ただし……

7. リニア工事に対する考え方

ただし、

「①自然環境の保全」については、まだ国交省・静岡県・静岡市それぞれの会議で議論が続いており結論が出ていない。

→ 利水者の合意もまだであり、トンネル掘削は認められない。

「②地域振興への寄与」については、富士見峠の県道トンネル、林道東俣線の路線バス水準への改良、工事後の工事宿舎の活用などに取り組んでいただいていることは評価。

当社としては、JR東海は当社の前提条件3点、特に「①自然環境の保全」を遵守しているか監視をしていく。

7-1.リニア工事への懸念

■環境保全について、専門家およびJR東海の説明を待つ
自然環境への影響について、不安が完全に払拭された訳ではない

■理由

- 科学は発達しているが、自然には未解明な部分がある。まして、南アルプスの地下深くのことはよく分からない。
- 当社は南アルプスに最終的な責任を持たなければならない立場 だが、リニアトンネル工事の影響について前ページの状況を踏まえ今の段階ではまだ判断がつかない。
- 専門家の意見をJR東海が実行することを信じると同時に会社として監視をしていく。
- 発生土置き場については、JR東海が自然環境と安全性について最大限配慮して施工することを監視していく。
- できる限りの対策を講じても自然環境に影響する恐れはある。それは受入れ、新たな南アルプスの自然環境として活用する。

7-2.リニア工事（JR東海）への期待

- これまでJR東海が約束してきた環境保全措置の確実な実施
 - ・南アルプスは、リニアという世界最高の技術と世界が認めた自然環境とが交わる場所
 - ・世界が認めた自然を守りつつ世界最高のリニアを通した例として、世界から視察が訪れるくらいの対応をお願いしたい
- 自然環境の監視拠点とその結果や調査結果を紹介する場の開設（仮称 南アルプス自然研究所）

- 静岡県、井川地区へのリニアの恩恵の実現
 - ・リニア工事の一環としての、井川地区がエコパークの理念に沿って活性化するための基盤整備（林道東俣線の路線バス水準への改良、通信環境の改善など）
 - ・リニア関連施設の多目的利用（作業坑を利用した観光誘致など）

- これらの実行における静岡県、静岡市との協働

8. まとめ

井川山林の・・・

あゆみ

- 井川山林は江戸時代以降木材生産の場として活用されてきたが、現在は森林が再生している
- 大正期から水力発電の開発がされ、大井川の水は高度に利用され、河川流量は自然状態よりも減少している
- 国立公園級の自然環境として評価を得ている

自然環境と 事業との 両立

- 井川山林の価値は、豊かな自然環境
- 井川山林は当社だけではなく、地域の宝でもある
- 「自然を守り、自然を活かす」を基本理念とし、自然の恩恵を活用した事業を通じて井川山林の価値向上を目指している
- 現在は登山客・釣り客向けのロッジ・登山小屋とウイスキーが主

自然環境と リニアとの 共生

- リニアに対し当社は、自然環境の保全、地域振興への寄与などを条件に交渉を行い、リニア準備工事を受け入れることとした
- 自然環境の保全は大前提
- JR東海には専門家の意見に基づく環境保全措置の確実な実行を求めたい
- あわせて、南アルプスの地域振興に対し寄与することを期待したい